

常照

第830号

五濁惡世に生きた人

少年親鸞出家の事情

真宗寺院の年に一度の報恩講中に、親鸞聖人の御生涯を表わした「御伝鈔」を、僧侶が声高々と詠ずる習わしがある。声をつまらせたり、目に涙を宿しつつ、詠みあげることもある。その初めの段落に、「それ聖人の俗姓は藤原氏（中略）栄華をもひらくべかりし人なれども、興法の因うちに萌（きざ）し、利生（りしよう）の縁ほかに催（も

よお）ししによりて（後略）」とある。この後文を略述すると「聖人九才の春に伯父範綱卿と一緒に青蓮院におもむき、前大僧正慈円のもと、髪を剃って、天台宗の僧となつて範宴と僧名を名乗った。それから、天台宗の教義を学んだ。」となる。ただ気になることがある。それは、親鸞出家の直接の動機について、一切ふれていないのである。仏より衆生利益の務めに遣わされた親鸞であるが、生身の人間としてこの世に生きているのであるから、出家の特別の事情があったであろう。

親鸞の身上に何が起きたのか

父有範の引退、領地没収により、経済的基盤を失った有範一族であ

つたが、父は三室戸の地に遁世した。一家離散である。親鸞の外、兼有、行兼の弟達は伯父範綱の養子となった。残りの二人の弟は、別の縁者に引き取られていったのである。吉光女という名の女性と伝わる母親の消息は知られていない。有範家の取つぶしは、養和元年（一一八一）親鸞得度と同時期であろう。当時、父は皇太后宮の大進職に任ぜられていた。皇太后宮とは、先帝の皇后を所管する官庁である。その時の皇太后は、平清盛の娘、徳子で高倉天皇の皇后で、今上安徳天皇の生母である。前年の治承四年（一一八〇）安徳天皇即位と同時に皇太后となった徳子は、皇太后宮を平家一族で固める中で、有範、平家の不興をか

つたのか、目障りな存在であったのか、何らかの口実で罪科を課せられたのであろう。このころ、平家の勢力は、頂点に達していた。以仁王（もちひとおう）の乱後、畿内では、いかなる者であれ、反抗するものはいなかったのである。平家一門の圧力に有範の領地を取り上げたのであろう。但し、平家滅亡の後日、親鸞の息男、有房（益方大夫入道）は、官位従五位下を賜わり、官途に着いたようである。いずれにせよ、家の没落は、親鸞を仏道修行への道に誘ったことになる。

明日ありと思う心の仇桜

夜半に嵐の吹かぬものかわ

僧となることを心に決めた夜、

伯父であり養父でもある範綱卿に意思を告げた和歌である。親鸞は、桜の夜道を伯父を具して、青蓮院の慈円師のもとへ赴いたといわれる。濁悪世界から、隔絶された夢の様な詩情である。

一方、晩年著作した「三帖和讃」の中に、「五濁悪世の衆生」「末法五濁の」「濁世の有情：」「像末五濁の世となりて」等を多数の濁りきった世界を強く表現している。

史上最悪の時代を生きた親鸞

比較的平穏な現代に生きる我々（殊に大戦後生まれの人）には、過大、過激な表現と感ずるのである。五濁悪世を実際に生き抜いたのが平安末期から鎌倉時代の頃である。地震、風水害、飢饉の自然災害

の多発であった。平安鎌倉時代に自然災害の統計記録などあるべくもない。手掛かりは、年号の数である。新天皇即位の時と、大きな自然災害が起きると不吉であるとして年号を改めていた。平安遷都（七八一年）から親鸞誕生の前年までは、災害による改元は、約八年に一回平均で、親鸞の生涯九十年の期間では、同じく、約三年一回平均となる。親鸞の時代には、それ以前の二倍以上の災害があったことになる。殊に、甚大な被害を及ぼすのは、飢饉である。全国的、広範囲な地域に長期間にわたるのである。来年の収穫を待たねばならない。親鸞の生涯で、三度の大飢饉に見舞われた。大飢饉が二年三年と連続して起っているのだ

る。いわゆる「寛喜・貞永」の大飢饉は、歴史上最悪で、三年に及んだ。飢えで三人に一人は餓死したともいわれる。正に餓鬼道に落ちた如く、ありとあらゆる悪事が蔓延したであろう。親鸞自らが、五濁悪世の衆生であることを悲歎した和讃ではなかったのか。

五濁悪世の衆生の

選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の

功德は行者の身にみたり

親鸞の声が聞こえるようである。「誠なるかなや、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。」と。

三月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 三月七日(火)〜十一日(土)

東京教区茨城東組清心寺

講師 増田廣樹師

○後期 三月十三日(月)〜十六日(木)

熊本教区益東組教尊寺

講師 大道修師

○春季彼岸会布教

三月十九日(日)〜二十一日(火)

北海道教区十勝組玄誓寺

講師 上本周司師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

◎浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。
尚、三月二十一日(火)は春季彼岸会の御中日のため月忌参詣はお休みさせて頂きます。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇三三四) 二二〇七四四番
FAX (〇三三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一六番